

第 623 回 :問題設定とは (DM)

みなさま、こんにちは。LA 毎週月曜 14 : 00~17 : 00 担当、博士課程 (後期) の DM です。今回は、レポート作成における問題設定とは何かということについて、説明していきたいと思います。

前回、レポート作成の大まかな順序を、1) 問題設定、2) 資料調査、3) 執筆計画、4) 原稿執筆——と説明しました。もちろん、どの手順も必要です。ただ、問題設定について言えば、これがなければレポート作成が始まらないという点で、特に重要です。

ここで言う「問題設定」とは、主題と対象を設定すること、と考えてください。「主題は抽象的な問い、対象は具体的に調査できるもの」(小熊 2022 : 102) のことです。「主題」がなければ、何のために調査をするのかが説明できません。「対象」がなければ、そもそも調査をすることができません。抽象的な問いを明らかにするために、調査すべき具体的な物を決める——これが問題設定、というわけです。ただ、この説明自体がいささか抽象的ですから、具体例を挙げましょう。

研究のモデルとして分かりやすいのが、自然科学、理科の実験です。たとえば、「二酸化マンガンを過酸化水素水と混ぜて、酸素を発生させる実験」(小熊 2022 : 70) の場合、「酸素はいかにして発生するのか」という法則性の探求が主題、「二酸化マンガ」や「過酸化水素水」は、主題を明らかにするための対象、そして実験結果を記述したものがレポートになります (小熊 2022 : 110)。

とはいえ、身近なものが対象であっても、レポートは書くことができます。たとえば、とある文献には、「本学の学生食堂のメニュー

ー」を対象にして、その献立の「栄養面の配慮が不十分なこと」の探求を主題としているレポートの例が紹介されています (木下 1994 : 066-068)。

これらの例を見ると、どの主題も、設定されている問いの形がかなり明確であるのが分かります。「酸素はいかにして発生するのか」、「食堂メニューの栄養面の配慮は不十分であるか」——これを読むだけでも、問いが求めている答えが具体的にどんなものであるか、大まかな見当はつくようになっています。少なくとも、「酸素発生とは何か」というような、概して曖昧になりがちな問題設定は行われていません。

戸田山によれば、「**卒論の出来は問題を絞ることができたかで九九%決まる**」(戸田山 2022 : 78)。一応は学術論文であり、しかも制作期間が大抵二年は設けられている「**卒論**」でもそうなのですから、制作期間が長くても半年しかない学期末レポートの場合は、言うまでもありません。得られる答えは些細でよいのです。明らかに、レポートの評価基準は、答えをどれだけ適切に証明できたか、という点にあるのですから。

というわけで、今回の LA 通信はここまでです。次回は、——私は今まさに戦々恐々としているのですが、——予告通り、レポート作成を実践すべく、自分でも問題設定を行っていききたいと思います。……みなさま、何とぞよろしくお願いいたします！

引用文献

木下是雄『レポートの組み立て方』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房、1994 年：

第 623 回 :問題設定とは (DM)

N080=30=7-1-1、閲覧室入口正面

小熊英二『基礎からわかる論文の書き方』
(講談社現代新書 ;2660) 講談社、2022 年 :
K2660、閲覧室入口正面

戸田山和久『論文の教室 : レポートから
卒論まで』(NHK ブックス, 1272; 最新版)、
2022 年 : N816.5==140、閲覧室入口正面